

# テキスタイルデザインにおける授業研究（その1）

—平織り技法による作品製作—

Lesson study in textile design (part 1)

—Work production by plain weave technique—

大 信 田 静 子

Shizuko OSHIDA

## I はじめに

織物の歴史は古く石器時代に遡ると言われている。人は生まれた時から布に包まれ身を保護し生活をしている。その生活の営みに布は欠かす事のできない素材であった。布は経（たて）と緯（よこ）の構成により織られている。その機織は大きく分けて地機といわれる経糸を腰に取り付けて張り具合を調整しながら織っていく方法と高機と言われる機織は枠に経糸を取り付けて腰をかけて織るものがある。更に織機の機械にはろくろ式で織り機の上部のろくろ部分が、つるべのような仕組みになっているもの、天秤式で織り機の上部にバランスをとるためのはね木がついているもの、レバー式でレバーやボタンに綜統をつないで使用するものがある。織物は基本的に経糸と緯糸の組織からなり、そこに関わる綜統の通し方、踏み機の踏み方で織り組織が変わり、あや織りや朱子織、二重織り、つづれ織りなどの織物ができあがっている。

人々は暑さや寒さから身を守るために布をまとってきた。特に東北地方は寒冷な気候で木綿が育たないため、日常生活に用いる衣類や布団などの布は麻を栽培して葉を裂いて細く繊維状にし、織り上げていた。この織物は裂織の起源とされている。雪国では着るものといえば麻布、藤布、科布を織ったもので暖かい木綿は貴重であった。この裂織りは布が擦り切れた箇所に別の布を張り刺し子で補強して使用し、更に擦れてきたら、ほどいて布を細く切り緯糸として地機織り機で夜着、仕事着、帯、前掛けなどへと再利用した。そこにはどんなに小さな布も無駄にしない思いがあった。昔から親が子に躡ける言葉の一つに「もったいない」がある。物を大切に扱い、無駄なく使わせて頂くという、日本の伝統的な精神風土の背景がある<sup>1)</sup>。

2010年の流行語にも選ばれた断捨離は不要なものを減らし、快適な生活をおくるために整理することである。それもまた大事な事ではあるが、別な形で息を吹き込み再利用することで、生活に彩を添えると共に、物を大切にすることを養うことが出来るのではないだろうか。昔から大切にされてきた手仕事を「テキスタイルデザイン」の授業に取り入れ、小さな端切れも、また着古した洋服も捨てれば片付くが、物の大切さと手作りの温かさ、更にはゴミの減量、資源再利用、再生利用など今後の経済にも繋がると思う。このことから織機に触れ経糸と緯糸の織り成す色彩の豊かさや布から創造し表現することを目的とした。

## II 方法

手織りの平織りは経糸・緯糸との交差により平面な布を織り出す手法で、基本の織り物として「テキスタイルデザイン」で実施している。作品はランチョンマットとコースターを製作し、大きさは、たて25cm、よこ45cmとしている。更にそのままの経糸を使用してコースターをよこ12cm、たて12cmのサイズを2点仕上げている。この平織りの緯糸の手法として、平織りのみで織る学生、裂き織り（布を裂いた糸）やレース織り、浮かし織りなど学生の意欲にあわせ数種類の織りを体験できるよう設定している。

織機は30cm幅のアジャカ 2枚綜統卓上織機を使用している。作品の出来上がりの長さ（45cm + 12cm = 57cm）であるが、色々な学生に対応できるように60cmと多めに設定しこれを基に糸の計算を行っている。

### 糸の計算方法

整形長 = 出来上がり長さ（60cm） + 織り縮み分（10%） + 織り始め分・織り残り分（40cm）

通し幅 = 出来上がり幅（25cm） + 織り縮み分（5%）

経糸総本数 = 通し幅（26.3cm） × 箆の1cmあたりの目数（4本）

として算出したものを使用している。

端の始末はネクタイ結びで仕上げ房の長さは各自とした。

これらの基本と更に応用作品1点を製作している。更に「創作テキスタイル」では裂き織り、フェルト（羊毛）、絞り、手編み、手芸的技法なども取り入れ洋服に仕上げている。

糸の交差した色合いをみるためのサンプル制作教材として身近にある食品トレーを使用している。トレーは縦線を5mm間隔に印字した紙をセロテープで貼り付け、それに沿って挟みで切り込みを入れる。その切り込みに経糸をかけていき、網針やとじ針を使い織っていく。作品のサイズはトレーの大きさにより異なる。

## III 結果

### 1. 基礎を中心とした機織

先人の知恵であり、寒さから身を守るために繊維を織り1枚の布としてきた機織を身近に取り入れた授業である。織機は操作が簡単である30cm幅のアジャカ 2枚綜統卓上織機を使用し、基本として平織り技法のランチョンマットとコースターを製作している。作品の仕上がりはたて25cm、よこ45cmの大きさとした結果、計算法に当てはめると整形長106cmであるが整形台は10cm刻みになっているため110cmで整形している。織りの経糸である総本数は105.2本と端数になったため、106本の糸数での整形とした。織機は2枚綜統で基本的な平織りとしているが、裂き織り技法やレース織り、浮かし織りなどの手法も提案した結果、意欲のある学生は間に浮かし織りを取り入れていた。

写真1に示すように整形台に110cmの長さで106本を整形するのに平均時間90分（1コマ）でやり終えている。その後の作業として写真2に示すように106本の経糸を2枚の綜統に交互に通していくのは、地道で根気の要る作業のため平均時間280分（3コマ）かかっていた。そのため、かなり嫌気をさしていたが、ここ

は一番大事な工程手で、通す場所を間違えると、その箇所までほどいて修正をしなければならない事から休憩を入れ、眼の疲労を取るよう促し進めた。その結果2枚綜統の交互に通す作業の間違いは2名、5箇所の訂正で終える事ができ、昨年より少ない訂正であった。実習作業は集

中力を上手にコントロールしていかなければ、無駄な時間や効率の悪さにもつながるとともに安全面からも必要であった。また気持ちを高めるためにも他の学生の進路状況を把握させる配慮も行った。更に板杼（いたひ）に巻く緯糸は使用する糸の種類を制限しない事で、糸の選びが慎重になる上それぞれの個性を出すことが可能である。創造力を高めるために、織り幅によるバランスや重なりによる糸の色合いを24色の色鉛筆を使いイメージを描かせている。

これらを考慮した結果、色選びに少なくとも20分から30分かき真剣に考えていた。また選んだ色糸と同色系の色鉛筆で経、緯糸の線を描き織ったイメージを描かせている。写真3に示すように経糸を織機にセット後、各自好きな色の種類を緯糸に入れる作業は楽しく休み時間になっても織り込んでいる学生が見受けられた。

写真4・5・6は出来上がった作品である。織り上がり後、機から外すと歓声が上がリ最後まで織り上げた達成感の喜びを感じたことで、最後の房の始末も懸命に仕上げようという意欲がでていたことから効果があったと考えられる。

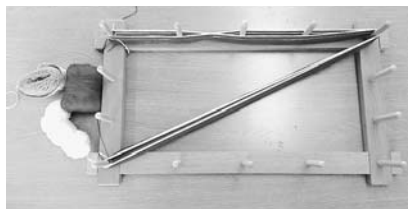


写真1 経糸の整形



写真2 綜統通し



写真3 緯糸入れ

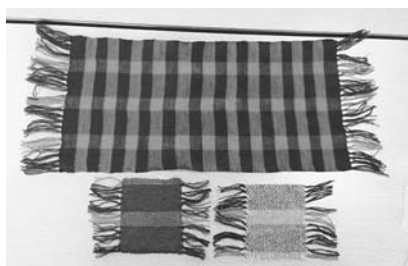


写真4 スフ糸の平織り作品

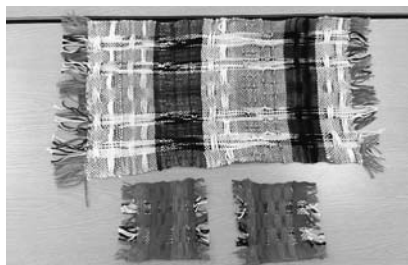


写真5 浮かし織りとレース織り作品

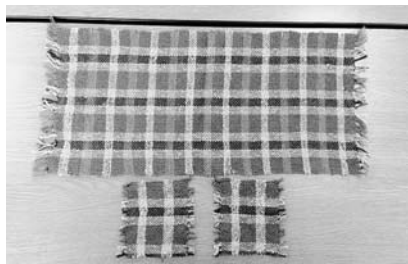


写真6 変わり糸作品

## 2. 卒業研究作品に活かす効果

基本的な平織りではあるが、素材を変えることで、陰影や重み・深みを演出できる。基本的な機織を学び素材からオリジナルの布を仕上げる事で、世界に一つしかない作品を作り出すことができる。「テキスタイルデザイン」「創作テキスタイル」とこれらの作品製作を通して数人は卒業研究にも取り入れ製作している。卒業研究は1年かけて素材から手がけ愛着のある作品に仕上げている。写真6に示す作品は、市販のサテンリボン、変わり毛糸（極細）3種でいずれもベージュ色で織り上げている。更にスカート部分に市販の小花カットワーク木綿布を使い手織りとのコラボした作品である。

織り上げた布は、6m程の長さで幅は45cmである。

写真7に示す作品は、広く開いた衿元に幅広のフリルを施し、ウエストラインにはペプラムにして仕上げている。写真6・7の作品はこのように、素材から布を織り上げて作る事でイメージの布が織れ、個性を前面に押し出し、そして重みと愛着を感じ取れる洋服に仕上げられている。



写真6 卒業作品



写真7 卒業作品

## IV 考察

人は生命の誕生とともに包みの布に包まれ大切に育てられると共に、人々が生活を営む上でテキスタイルは身体保護や生活空間の在り方に深く関わっている。先人の知恵により自然の融合から独特な染色文化・織りの文化を开花させてきた。現在はコンピュータが進み、彩と共に生活を華やかに豊かにしている。北海道の織物といえば、アッシ織と優佳良織があり、アッシ織は、赤・白・黒の3色を使って織られ、優佳良織は200色もの色を使い、羊毛で北海道の四季の深みを織り込み表現したものである。現在は身近には程遠い手織りではあるが、手作りの温もりや優しさ、個性あふれるデザイン、発想を大切にすることを顧慮しながら授業に取り入れている。平織りの基本的な技法ではあるが、ランチョンマットとコースターの小さな作品から、経糸と緯糸の織り成す色彩の深みや発想の豊かさ、そして達成感を味わうことで物事を成し遂げる喜びを感じることができたと考える。更に個々に選んだ糸での織りはたった一枚しかない作品へと繋がり、歓声へと導くのではないだろうか。例え同じ糸を使っても、織り加減、力の入れ方で下の糸の色の見え幅が変わってくるため違う作品に仕上がる。

また特に織物の材料は身の回りを観察し、五感を働かせることから様々なアイデア、工夫が生まれ個性あふれる作品へとつながる。写真8のように一枚しかない布を製作して、裁断し

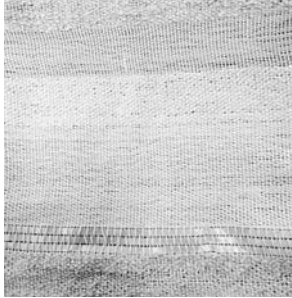


写真8 変わり糸の織り

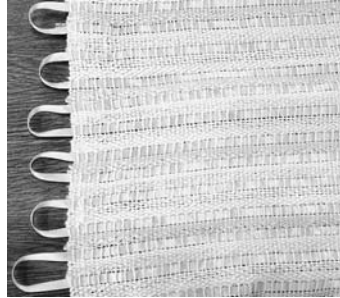


写真9 サテンリボン



写真10 食品トレー

仕上げた、2点のオリジナルのドレスは、経糸と緯糸の織り成す可憐な色彩と3種類の糸の質感で更に繊細な布を織り出している。そして写真9のサテンリボンの光沢の織りが美しさを添えている。たった一枚しかない布で縫製したオリジナルの衣服は掛け替えのない一着である。

平織りは、毛糸はもちろん糸にビーズを入れたり、古くなった洋服を解き、平面の布にしたものを裂いて織ることや様々な素材を織り込むことで、その風合いや用途を考え様々な場所への活用が広がってくる。このように、織りをもっと身近に取り入れる事を考え、写真10に示すような食品トレーを使い手軽にコースターや織った小さなパーツを数枚繋ぎ合わせることで大きな作品へと仕上げられることも可能である。また織りは手、特に指先を使うことで、脳の活性化に繋がり高齢化社会にも役立つのではないかと考える。

## V まとめ

手織りの作品を製作するには、根気と集中力が必要であり、その気持ちを引き出すために、休憩を入れ、眼の疲労を取ることで、2枚綜統を交互に通す根気のいる作業での間違への減少に繋がっていた。また、集中力を上手にコントロールするために、他の学生の進路状況をみせ、その後の作業意欲へと繋げることの効果があった。更に、糸の種類を制限しないことで糸選びに真剣に取り組んでいたことも効果的であった。好きな色糸を織り込むことで達成感を味わい、そして個性あふれる一つしかない布へのこだわりが卒業作品へと繋げることができた。

今後の課題として人（衣服）や空間（生活風景）を引き立てるテキスタイルの素材としての要素を、更に取り入れ様々な素材作りに活かして行きたいと考えている。

## 引用文献

- 1) 箕輪 直子：裂き織り大全 2017. 2 第3刷発行 p129

### 参考文献

- 1) 馬場きみ, 彦根愛: 手織り工房 2008. 1 発行, グラフ社
- 2) 藤岡恵子, 佐久間美智子: 手織り (織りの基本技術 その発想と展開) 2001. 4 第8刷発行 創元社
- 3) 浜野義子, 田中圭子他: ハンドウィービング (手織りの実習) 2001. 2 第9刷発行 文化出版局
- 4) 田中秀穂: テキスタイル [表現と技法] 2010. 11 第3刷発行, 武蔵野美術大学出版局
- 5) 浅井潤一: 織りに遊ぶ (創作市場24) 2003. 6 第2刷発行 マリア書房
- 6) 田中忠三郎: 物には心がある (消えゆく生活道具と作り手の思いに魅せられた人生) 2017. 4 第4刷発行 アミューズ エデュテインメント
- 7) 小出由紀子, 都築響一: BORO 2017. 1 第4刷発行, アスペクト